ハルのお話

くまタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハルのお話

【Ｎコード】
Ｎ２９４４Ｎ

【作者名】
くまタン

【あらすじ】
ハルが嫌いな獄寺

相手だってハルのことが嫌いなはず・・・

イヌとサル（前書き）

犬猿の仲

ハルと獄寺

出会えばケンカばかりの二人

イヌとサル

「はひっ！！どういうことですか？」
「どういうことか？そんなこともわかんねえのかお前は！」

二人のいつもの言い争い

おたがいにある人への思いが強すぎるためなのか、こんなことがちょくちょく起こっている。

「まあまあ、二人とも・・・獄寺君もハルも出会えばいつもケンカばかりしないでよ・・・」
（・・・お願いだから・・・仲良くしてよ・・・）
二人の仲裁に入っていった少年は頭を抱えていた。
「・・・すいません！！俺が大人げないせいで・・・アホ女のことなんて相手にしなければ、十代目に入らぬ心配をかけるようなことはありませんのに・・・」
「アホ女？・・・誰のことですか～！」
「お前のことだよ！！オ・マ・エ・の！」
「な・な・なっ！」
言い争いをしている女の方の声が上ずっている。
「まあまあ～ふたりとも、ケンカはその辺にしておけよな」
さらにもう一人が止めに入った。

山本　武

「ケンカはよくない・・・よな・・ツナ」

山本はもう一人に同意を求めた。

「・・・そうだよ～・・・二人にはもうちょっと仲良くしてほしいなぁ～って思っているけど・・・」

（・・・って、前々から言っているけど、それができたら苦労しないけど・・・）

イヌとサル（後書き）

ハルとハルが通う学校の友達との日常を書いてみました。

変な表現や言葉足らずなところがあるかもしれませんが、そこは我慢してください。

ハルのお友達　紹介

愛歌（アッちゃん）・・・・ハルの中学の同級生
カッコイイ男に目がない
少し言葉がきついのでトラブルを起こすこともあるが、
本当は友達を大切にしている
ハルとケンカをよくしてしまうが、
次の日にはけろっとしておしゃべりをするくらい
あまり細かいことをきにしない
かなり喜怒哀楽が激しい

琴葉（琴ちゃん）・・・・同じく、ハルの中学の同級生
普段は口数は少ないが、怒るとかなり怖い
あまり友達づきあいをしないが、
なぜかハルとは気が合うようで仲がいい
気が短い二人のクッション的な役割をになっている

（特に、ハルの暴走抑制）
ココアが好き（あま～いもの）

お友達とおしゃべり

「・・・・・でね・・・が・・・・なんですって～」

「・・・・・」
「・・・・・」
「・・・・・」
「ねえ！ハルの話を聞いています？」
「・・・聞いてるって・・・」
（・・・コクン・・・）

とあるファーストフード店

ハルは学校の友達と三人でお茶をしていた。（おしゃべりをしにきた）
周りもハル達と同じようなもので、お店の中は比較的うるさい状況となっていた。

「・・・ほんとに？」
「ホント、ホント」
（・・・コクン・・・）

（・・・明らかに嘘だ・・・）
ハルのカンはそう言っている。

「・・・それで、ツナさんがハルのケーキを全部食べたんですよ～」
「・・・ウンウン・・・」
（・・・ちがう・・・）

「・・・・・」
「・・・・・」

（・・・話を聞いていなかった・・・）

「あたしのツナさんがそんなことするわけないでしょ！！ハルの話、聞いていませんでしたね！！！」
「だましたな！ウソつくんじゃないわよ！！」（じゃくギレ）

二人は同時に目の前のテーブルを思いっきり叩いて、立ち上がった。

「ウウッ～～」
「ウウッ～～」
二人はにらみ合って動かない。

約一分

どっちも引かない
二人とも一度、こうと決めるとそれしか見えなくなるようで、学校ではよく言い争いをしていた。
はじめの内は、周りの人達が仲裁に入ってくれていたが、しばらくすると「・・・また、やっている・・・」っていうことで、誰も相手にしてくれなくなった。

「・・・私、帰っていい？あなた達の仲間と思いたくない・・・」
（ここにきてはじめての声）
いつもなら、琴葉でさえも相手にはしないようにしていたが、場所が場所なのでこのままという訳にはいなかった。

（いくらなんでも、他の客の視線が痛い・・・）

その言葉に二人は一斉に琴の方を見た。
お互いに何かを言いたそうだったが、その言葉を発することはしなかった。

（怒っている・・・これ以上何か言うと、後々大変なんだよな・・・）
二人は一瞬目配せをして冷静になり、今度は琴葉のご機嫌取りをすることになった。

「・・・ハル達の話はもうやめて、今度は琴ちゃんの話を聞きましょうか？なんでもいいですよ～」
「そうそう！今度は琴の話を聞きたいなぁ～ハルの話しばかりじゃあ飽きるしなぁ」

「そうそう、ハルの話しばかりじゃあ飽きる・・って、ハルの話はつまらないってことですか？」

「そうじゃん。今頃気づいたの？」

ムカッ！

「何、言っているんですか！いつも、いつも、そう思っていたってことですか～！みんなしてハルの話なんかどうでもいいって思って、聞いていたんですか？」

？ガタン！

琴葉はコップをテーブルに強く置いた。
（顔は笑っているようだが、・・・・目は明らかに笑っていない・・・さらに機嫌が悪くなっている）

「・・・・・」
「・・・・・」
「・・・あっま～いココア飲みますか？」
「・・・ウン・・・・」（コクン）

お友達とおしゃべり（後書き）

ハルのお友達の話が続きます。
どのくらい続くかわかりませんが、覚悟して読んでください。

二人にとっての私

「・・・会ってみたい」
「ツナさんにですか？」
「そっちも見たいけど、ほかのほうも・・・」
「・・・・？」
「・・・ハルの話で出てくる人達に会ってみたいっていうこと・・・」
愛歌は前々から、ハルの話に出てくる人達に一目会ってみたいと思っていた。もちろん、ハルだってそのことは前に聞いていたので、会わせる約束をしていた。
だが、その機会がなかったので今まで合わせることができなかった。
「私、前々から言っているんだけどなぁ～・・・ねえ、琴も会ってみたいよね？」
琴葉に同意を求めた。
琴葉も仲間に連れ込んで、ハルの男友達に会おうという魂胆がみえみえだ

「・・・私はいいや・・・」
「ええ～～！ことはいいの？イケメン（？）に会えるんだよ？目の保養だよ！もう出会えないよ」
（アッちゃん、話がおかしいほうにいってない？）
愛歌の意見（願望）に対して、琴葉は冷めたひと言
「・・・あまり興味がない・・・っていうか、はっきりいってどう

でもいい・・・」
「どうでもいい？どうでもいいってどういうことよ～！」
琴葉はかなり乗り気ではない。もともと、人付き合いが苦手である琴葉が『嫌だ』というときは、ハル達がどんなに説得してもだめだということは付き合いからわかっていた。
「いくらなんでも私だけであるのはちょっとね～・・・ちょこっとでいいから、付き合ってよ～！嫌ならなんか理由つけて帰ってもいいから？」
今回は愛歌は引き下がらない。
ほんとは、愛歌は琴葉にもうちょっと人との接点を持ってほしいと思っていた。
琴葉は学校でもあまりおしゃべりとかをする姿を見た記憶がなかった。あえて、他人と距離をとっているというわけではなかったが、学校の人達が興味がある話題を選んでまでして話を合わせて親しくなろうとはしない。
自分を偽ってまで友達を作りたくないという気持ちは愛歌もハルも理解していた。だが、琴葉のそんな性格を将来的に心配して、愛歌がわざわざ多少強引にでも付き合わせようとしていた。
そんな事をしてくれていることは多少なりともうれしかったが、大きなお世話でもあった。
「まあ、無理につき合わせるのは、かわいそうですよ。アッちゃんが一人で会うのが嫌なら、紹介するのは諦めましょうか？」
「う～～！ねえ！ほんとにカッコいいんでしょ！ハルの男友達って」
（ちょっとまて！）
「・・・ハル、いつカッコいいって言いましたけ？・・・そりゃ、ツナさんはカッコいいですけど・・・」
「・・・それはどうでもいい！どうなの！！ハルの感覚でなくて客観的に見てカッコいいんでしょ」
「ハルの感覚はちょっとずれているからね」
（・・・琴ちゃんも話に入ってきている・・・）

いつの間にか琴葉も話に入ってきた。
琴葉だって女の子なので、そういう話題にそれなりに興味があるようで、目がいつもに増して真剣だった。
「おっ！琴ちゃん、さっきの言葉とうって変わってかなり食いついてきたね～！」
「・・・ハルの感覚が変わっているのは事実・・・でも、私はハルのいう『ツナ君』のほうならにちょっと興味がある。どんな変わり者か見てみたい」
いらずらっぽく、小声で琴葉は言った。
いつもはそんなに感情豊かではないが、ときたまそういうことを見せてくれる。

「んん～～～」

（ハルは二人にどう思われているのかはよくわかった気がします）

男友達を紹介できない！！！

「会う前に、どういう人なのかを聞いておかないとね」
愛歌は興味津々、琴葉のほうもそれなりに興味をしめしていた。

ファーストフード店からカラオケボックスへと移動して、ハルの男友達の話を問いただすことになった。
今までいたところではその話ができないわけではなかったが、話声が大きすぎるようでときたま周囲の目が痛かったという理由だった。
それに比べて、ここなら防音設備完備ということで、どんなに騒いでも周りに迷惑をかける心配もない。
「・・・本当にカッコいいんだよね！本当に」
「・・・いつまでもそればっかり・・・ほかにいうことはないの？」
（もうどうでもいいデス・・・適当に説明して、帰りたい～～）

二人の異様なテンションにハルはウンザリ

「・・・それじゃあ、まずは『タケシ』さんからいいですか？お家は寿司屋さんです。そのためか、なにかあるとお寿司を持ってきてくれます。そのお寿司がとっとも美味しいんです～！学校では、いつも寝てばかりいて先生から目をつけられているようですが、感がいいようでうまく切り抜けているようです。・・・あと、『野球・命』だと言っています」
まず、てはじめに『山本武』の紹介

多少大げさな言い方だったかもしれなかったが、ハルの話をすべて鵜呑みにするようなことはしてはいないことをよく知っていた。
「坊主はちょっと・・・それに、汗臭そうだからパス！」
まだ会っていないのに勝手な想像から、愛歌は山本のことを外してしまった。
「・・・私も、そういう方向はいいや・・・かなりガサツっぽい感じがするから・・・」
琴葉も愛歌と似たような印象を持っているようだ。
（いわいる、体力バカとか熱血系を想像している・・・会ってみればそういう人じゃないとわかるんだけどなぁ～これじゃあ、京子ちゃんのお兄さんを紹介してもダメだな）
「他にはいい人はいないの？イイ人！イイ人！」
「・・・そう言われても・・・ひばりさんなんて危ないし・・・年下なら、フウ太ちゃんとかランボちゃんとか・・でも、カッコいいというよりも可愛いっていう方向だから・・・」
（結局のところ・・・誰も紹介できない・・・）
ハルはこの結論に至った。
「獄寺っていう人はどうなの？・・・結構いい男だと聞いていたけど・・・」
「なっ、なっ、何いっているんですか～！あんなヤツ！！ガサツで、目つきが怖くで、乱暴なヤツですよ～。獄寺さんなんて紹介できるわけないですよ」
ハルはどうしても獄寺だけは紹介しない気でいた。
出会えばハルと獄寺は言い争いばかりをしていた。ハルは彼を、

友達に紹介するわけにはいけないと思っていた。いくらなんでもいきなり彼女達に危害を与えることはないだろうけど、そのまさかがおこる気がするからだった。

（そういえば、私は二人に獄寺さんがカッコいいと言った覚えがないと思っていたけど・・・獄寺さんの悪口を言った覚えはあるけど・・・）

バレンタインの出来事？

「・・・あの人が乱暴な人とは言ったけど、カッコいいとはまでは言っていない・・・」

「いいえ！絶対にこの耳で聞きました！獄寺っていう人がイタリアから来た帰国子女でカッコいいって。バレンタインで、かなりもらったって聞いたよ～！やっぱり、イケメンじゃん！！」

（・・・話が変な方にいっていない？第一、獄寺さんはチョコなんてもらっていませんし・・・）

「一部、情報のバグがあります・・・確かに獄寺さんは帰国子女です。でも、チョコを渡そうとした子はいたようですが、近づきずらい威圧感を放っているせいで誰もわたしてなかったそうですよ！」

「でも、アンタは渡したんでしょ～。ちゃ～んと」

愛歌はにやけながら言った。

（なぜ、それを知っている・・・私そんなことを言ったけ？）

事実、愛歌のいっていることはホントだった。だが、それは義理チョコの余りをあげたものだった。ランボちゃんとかフウ太君とかにあげた残ったものをもったいないからあげたのだった。

・・・・・それには全く意味なんてなかったのに・・・・・

変な勘ぐりを受けるなんて心外

「ハルにとって、獄寺さんは嫌なヤツって位置づけなんです！！」

「・・ふ～ん、そうなんだぁ～」
そう思っていないことは明らかだ。そんなことは見え見えの表情で二人はハルにお話を聞いていた。
「・・・で、いつ会わせてくれるの？獄寺ていう人に」
「会う気ですか？・・・冗談なしに危ない人ですよ！！」

「いくらなんでも、それはいいすぎじゃない？・・・もしかして、もう手をつけちゃって会わせなくないっていうこと？それでも、意地でも会わせてもらうからねぇ～」

「・・・ハルちゃん・・・フケツ・・・」
琴葉の冷ややかの視線を受け流すハル
（琴ちゃんにつきあう気力ない・・・）

バレンタインの出来事？（後書き）

どんどん何を書けはいいのかが分からなくなっています・・・

私達の今の状況・・・アブナイ・・・

「・・・今さらだけど、こんなことしていいのかな？」
「？？？」
愛歌の唐突な一言にあるはどういう意味なのかが分からなかった。
「・・・最近、ちょっと物騒なことがあったから、あまり遊んでないで帰った方がいいんじゃないかってこと・・・ハルは知らなかった？」
（・・・そんなことがあったけ？）
琴葉の話を聞いても、ハルはそんな話は知らないようだった。
「その顔じゃあ、知らなかったようだね・・・けっこう、うわさになっていたからみんな知っていると思っていたんだけどなぁ～」
「・・・ぜ～んぜ～ん！ハルはそんなこと聞いたことはないと思いますけど・・・」
愛歌の話にもハルは知らないと返した。
「・・・冗談じゃなくて、本当に聞いたことない？」
琴葉はかなり神妙な顔つきでハルに小声で聞き返した。。
「・・・・・そういえば、京子ちゃんに会ったときになんかそういう感じの話を聞いたような気が・・・」
「そう！それだって。そういう大事なことをなんで聞き流すかな～！どうでもいいことばかり言っているから、そういうことになるんだよ」
ハルもようやくそのことを思い出したようだった。だが、聞き流していたことに関して特に気にかける様子はなかった。
（・・・心配だ・・・この子は絶対にひどい目にあう・・・間違いなく！）
愛歌と琴葉はそう確信した。

「・・・でも、並森ではそんなことは全くなかったから、大丈夫だと思ったんです！あちらでは、そんなに大事にはなっていなかったから・・・・」

「あそこが異常なだけ！ほかでは結構な騒ぎになったいるの！」

ハルの反論に、二人はハモリながら言い返した。

（・・・まあ、並中の風紀委員はあのヒバリさんだから不良達はあそこで騒ぎを起こすような馬鹿なことはしないから、並森は安全だろうけど・・・）

「ハルが何かトラブルに巻き込まれるのはハルの勝手だけど、私達まで巻き込まれるのは勘弁！・・・そういうことで、もうそろそろ解散ということで・・・」

「・・・そうですね！！ハルのせいでトラブルに巻き込まれたって因縁をつけられるのはイヤなので、帰りましょうか？」

愛歌の言葉にトゲがある

売り言葉に買い言葉、ハルもトゲのある言葉で返した。

（愛歌はちょっとした冗談のつもりだったのに・・・ハルはそれに対して、なにかシャクに障ってしまったようで、ついついハルも応戦をしてしまった）

琴葉はそんな二人にはあえて触れないようにしていた。

（こうなった二人ににかかわる気はサラサラない・・・変なとばっちりを受けるのはイヤだから）

「あっ！私ちょっとそこに用があるから、先に帰っていいよ・・・」

そう言って、愛歌は近くの本屋に入っていった。

「・・・私もついていく・・・」

それに続いて、琴葉も愛歌に続いてお店に入っていった。

二人においてきぼりをされたハル

私達の今の状況・・・アブナイ・・・（後書き）

今までは、ちょっとした余興な様なものでした。

これからが本篇です。

じゃあ、今までは何だったんだ？

二人にとってのハル

一方の本屋に入った二人

「・・・待っていると思う？」

「待っているだろうな・・・経験として」

「・・・いつもならね・・・いつもならこれで仲直りできなんだけど、今回はうまくいくかな・・・」

愛歌とハルのケンカの仲直りは一人になって一呼吸おくという簡単な方法で終わっていた。

そういうことを学んでいる愛歌だった。

（ハルはそのこと気は気付いていない・・・）

琴葉もそのことに気づいていたので、今日もわざと愛歌と行動を共にしたのだった。

今回もそれでうまくいくという保証はなかったが、だいたいケンカの原因がお互いの言葉のきつさというなことだったので、簡単に仲直りできるだろうと思っていた。

「今回は、なんだか周りがピリピリしているから一人でも帰るって考えているかもよ？」

「いや、逆に一人で帰るのが危ないから待っていてくれるっていう考えもあるけど？・・・ハルなら待っていてくれる」

琴葉の言葉に愛歌はすぐさま反論をした。

（かなり、個人的な私情が入ってきている・・・）

「・・・まあ、ハルは友達思いだから待っていてくれると思うけどね・・・」

「・・・そうだね・・・いくらケンカしていても、すぐ仲直りできるのはハルのおかげだね・・・」

なんだかんだ言っても、ハルの優しさでこの友情は保たれているんだろう。

「・・・もうそろそろ戻った方がよさそうだね・・・もしかしたら、待ちくたびれて本当に帰ってしまうかもしれないから」
「・・・二十分か・・・私だったらそく帰るけど・・・ハルならきっと待っていてくれるよね」
「どうだろう？今日はもしかしていなかったりして・・・」
琴葉はクスッって笑いながら、言った。
「・・・琴ちゃん・・言っていることがころころ変わるね～」
そろそろ出ようという琴葉に促されて愛歌も店を出ることにした。
（琴葉って仲良くなれば、結構お茶目なことを言うんだよな～それにたまにかなりキツイことをね・・・）

「あっ！あれはハルだよね！・・ほら、ちゃんと待っていてくれていたよ」
あの後ろ姿は確かにハルだった。
（ちゃんと待っていてくれた）
「お～い！ゴメ～ン待った？ほしい本売ってなかったから、買ってこなかったけど」
「・・・いいえ、そんなことはありませんよ！」

二人にとってのハル（後書き）

ハルと愛歌と琴葉の三人の友情を前から中心に書いています。

これ方もその線で書いていきたいと思います。

いらつきの理由

「・・・いいえ、そんなことはありませんよ！」

（機嫌が悪い。前よりも）

ハルの後ろを二人は歩いていた。

（歩くスピードが速い・・・それに加えて機嫌が前よりも悪くなっている）

「あれって、私のせい？」

「さあ？もしかしたら・・・そうかもしれないけど、ハルの性格ならはっきりと言うと思うけど？」

「・・・可能性は０ではないけど・・・もしかしたら、私のせいかもしれないかもって？」

「・・・・そうとはいっていないけど・・・」

愛歌と琴葉はハルの後ろを一定の距離をとって、小声で相談していた。

「・・・何、お話をしているんですか？・・・もしかして、ハルに聞かれたらまずいことですか～？」

・・・目つきが怖い・・・

（・・・これは・・・かなり頭にキテいる・・・）

愛歌と琴葉ほそう実感した。

「なんで、こんなに機嫌が悪いのよ！！・・・ハルのせいで居心地が悪くなっているじゃないか～」

この状況に耐えられなくなった愛歌がハルの機嫌の悪い原因を本人に聞いてしまった。

もし、その原因が愛歌自身にあってハルの口から直接言われたらどうするのだろう。

かといって、このままこの状況がずっと続いていくことは誰だって嫌だった。

だったら、ここはあえてその理由を聞いてそれを何とかするほうがまだなんとかなりそうだろう。

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・あの人に会ったんですよ・・・」

「・・・あの人って誰よ？」

愛歌の問いかけにハルはギラッとにらみつけて言い放った。

「獄寺っていう人ですよ！」

アイツ

（・・・どうしよう・・・）

二人に置いてきぼりにされたハルは悩んでいた。
愛歌には先に帰っていいって言われていたが、本当に帰るには多少の抵抗があった。
一人で帰るのが怖かったというものあったが、友達を置いて勝手に帰るのが嫌だったという方が大きかった。
愛歌とハルの間のちょっとした溝を生んでしまった今でも相手のことをつい考えてしまっていた。

十分後

まだ来ない

どうしよう

ホントに帰っちゃおっかな？

「・・・ハア・・・」

自然に溜息が漏れた。

「ため息の数だけ幸せが逃げるぞ」

（ビクッ）

よく知っている人の声が聞こえた。

（獄寺隼人だ・・・）

（よりによってここでこんな人に会うなんて・・・なんて運が悪いんだろう？・・・聞こえなかったことにして、無視しようかなぁ～）

「こんなところにいると通行の邪魔なんだよ」

（・・・道のハジにいるから邪魔にはなっていないはず・・・）

獄寺の言葉に対して、ハルは不満を感じながらもしぶしぶ振り向いた。

初めは無視しようかと思っていたが、そんなことをしたら後々いろいろといわれるのがシャクだった。

「・・・あら？獄寺さんどうしたんですか？お買い物ですか」

（・・・獄寺さんが買い物でこっちまで来るわけないから、そんなわけはないか・・・）

「それはこっちのセルフだ。こんなところで何やっているんだよ？・・・さっさと帰れよ」

「・・・帰れってどういうことですか？あなたにそんなことを言われる筋合いはありません！！」

もともと、二人は仲が悪かったうえに、ハルは愛歌との口げんかの後を引いているせいでかなり機嫌が悪い。獄寺はハルとはいつも口ゲンカをしている関係で、いつも機嫌が悪いもんだと思っていた。

「・・・俺はちょっと買い物だよ」

しばしの沈黙

「仕方がないだろ！なぜか並森には売ってなかったからこっちまで足をのばしたんだよ！・・・もういいか？」

（・・・本当に買い物？・・・意外だ・・・もしかしたら、ウソかもしれない）

獄寺の機嫌がわずかに悪くなった。

ハルは自覚していなかったが、顔がにやけてしまっていたのだった。

「お前の方はどうなんだよ？なんでこんなところでため息なんかつ

いていたんだよ？」
「そんなことをあなたにいう必要なないでしょ！」
これ以上突っ込まれることを嫌った獄寺はハルに質問をぶつけた。
それに対してハルは即座に反論した。
ハルのかなり機嫌が悪くなった
・・・・・
・・・・・
しばしの沈黙
お互いにこの場から離れなかった。
ハルは一応二人を待っていなければいけないので、ここを離れるわけにはいけない。
それなら獄寺の方が、ここから離れるしか選択肢はなかった。
「・・・さっさと用事を終わらせて帰るかな・・・」
何かを察した獄寺が独り言のように言ってハルの方を見た。
一方のハルはそんな獄寺のことなんて気付いていなかった。
「ハイハイ、さっさと消えてください！顔も見たくないですからね

〜！」

「・・・その言葉、そのまま返してやるよ・・・」

ハルの言葉に対して、獄寺の方はあきれながら言い返した。

案の定、その余計なひと言でハルの中の何かが切れた。

「それは、どういう意味ですか？」

「？？？？？」

（地雷を踏んでしまった）

獄寺はいつものようにハルに接していたが、今日に限ってハルの機嫌が悪かった。それに加えて、周りにはそんな二人を止めてくれるような知り合いもいなかった。

（いつもなら、ここで誰かが話の腰をおられて、うやむやにさせられる・・・）

獄寺はハルから何を言われてもそんなに気にするような性格ではなったが、ここは商店街の店の前で周りの目もある。こんなところで大声で言い争いなんかやっているのはまずいと感じてしまう。

一方のハルの方は多少は気にする方かもしれなかったが、日ごろは周りのことなんかお構えなしで周りを振り回していた。

それに対して、周りの人達はかなり振り回された上にかなりのトバッチリを受けてしまっていた。

（・・・周りを巻き込むなよ・・・）

振り回される人達はみんなそう思っていたのかもしれない

いつもの獄寺ならこんなことをされたらハルと盛大に言い争いをやっていただろうが、そんなことはせずに早くこの場から逃げ出したい獄寺は逃げるようにその場から離れた。

ハルはまだ文句を言い足りないようで逃げる獄寺の後ろ姿に罵声を浴びせていた。

「・・・ハアハアハア・・・」

獄寺に置いてきぼりにされたハルはいまだにその怒りがおさまらなかった。

そして、運の悪いことにあの二人が戻ってきてしまった。

さあ、帰ろうか・・・

「・・・はっきり言って、ただのトバッチリじゃないかよ・・・」
「・・・トバッチリ・・・メイワク・・・」
ハルが機嫌が悪い理由を聞いた（聞かされた）二人は行き場のない不満を漏らした。

一方のハルの方は、あたりかまわず騒いだおかげ？でかなり落ち着きを取り戻したようだった。

「・・・なんかノド渇きてきません？・・・ちょっとそこで飲みもの買ってきますね」
「ハイハイ・・・どこにも行かないから、さっさと買ってきてよね・・・」
マイペースなハルをあきれながらも、ほっとくようなことはしない二人。

（ハルはちゃんと待っていてくれたからね・・・！）

しばらくして、ハルは戻ってきた。

「・・・今度こそ、帰りましょうか？・・・ハル？イイよね」
愛歌の言葉にハルはなんで私に聞くの？って言う顔を一瞬したが、
そういう細かいことにはあえて気にしないことにした。

さあ、帰ろうか・・・（後書き）

今回は、短いです

ことのおこり・・・

「・・・ハル・・・前を見て歩いてよ・・・ぶつかるよ」
琴葉の忠告に対して、ハルはあまり気にせずに歩いていた。
いきかう人はそんなにいないが、確かにハルのことを避けながら歩いていることは明らかだった。まだ衝突という状況までいってはいなかったが、いつそうなるかわからない。

（・・・この人は他人の迷惑ということを知らないのか・・・）

愛歌と琴葉の心配をよそに、ハルは歩いていた。

「アッ！スミマセン」

（ほら、いったこっちゃない・・・）

案の定、通行人とぶつかってしまった。

・・・・・ぶつかったのは琴葉の方だったが・・・・・

琴葉は、三人の中で一番小さかった。
琴葉はハルのすぐ後ろを歩いていたのが悪かった。ハルの体で見えなかったようで、ハルをよけた人が琴葉にぶつかってしまった。

「・・・人のこと言う前に、自分の方が気をつけないと・・・」

琴葉に対して、ハルが振り向いてぽつりと言った。

「・・・ハル・・・前・・・」

「わ〜〜！なん・・・」

今度は、ハルが・・・ぶつかった。

ぶつかったハルは勢い余って、愛歌に抱きつきそうになってしまった。

実際には、愛歌の腕にしがみついてしまった。
（そのおかげで、ハルは転ぶことはなったが・・・）

「どこ見ているんですか！！」

「・・・ちょっ、ちょっと・・・」

いつもなら〈それはお前だろう！〉とごうかいなツッコミを入れているだろうが、今回はそんな状況ではなかった。

ぶつかった相手が悪かった。

高校生？くらいの男

ぶつかった男の後ろにも数人・・・仲間だろう・・・

背丈は一般の大人とそんな変わらなかった。

身なりが学生服を着崩していたから、高校生だろうと思えた。

「・・・スイマセン！この子、前を見ていなかったから・・・」

すぐさま愛歌が間に入ってフォローに入ったが・・・

「・・・おいおい、アンタからぶつかっておいてそれはないんじゃないか？」

（それはもっともな意見）

「そうだな、それなりの誠意を見せろってこと～」

そう言って、男はハル達の肩を掴んできた。

愛花はハルの肩を掴んできたその腕をすぐさま払いのけた。

「・・・やめてください・・・いこっ、ハル！琴葉！」

明らかに様子がおかしいので、愛歌は掴まれた肩を払いのけた。

そして、ハルと琴葉の手を掴んでこの場から逃げようとした。

（・・・この人達、何ムチャクチャなことをいっているの？・・・・

そりゃあ、ぶつかったハルが悪いことは明らかだけど・・・）

（それに、この人達なんか怖い・・・）

だが、男の仲間達が逃げようとした愛歌達の前に立ちはだかった。

「・・・大きな声を出しますよ。そうすれば、誰かが来ますよ。・・・・そうなったら、困るでしょ！」

もちろん、半分は脅しであった。その脅しが効いて、彼らが帰れば丸くおさまる。

もし、愛歌達がそこまでの行動に出ないとたかをくくっていたら、こっちだって本当にやってやるというきがまえだった。

（いくらなんでも、あいつらだって大事〈おおごと〉になれば逃げるだろう・・・そこまで、馬鹿じゃないだろう）

ことのおこり・・・（後書き）

約、二ヶ月半ぶりに書き終えることができました。

久しぶりで、おもうようにできていませんが・・・

ハッタリ

しばしの沈黙が続いた。

（これで、どうにかなるか・・・正直、かなり怖いけど・・・）

しかし、ここでそんな気配を見せれば、あいつらが調子づいてしまう。

そうすれば。この作戦が水の泡になってしまうかもしれない。

「・・・どうするの？・・・」（ハッタリ）

トドメ？の一言

だが、彼らの行動は意外なほうのものだった。

「・・・やってもいいけど～～」

（こいつらもハッタリをかましている？・・・だったら、こっちだって・・・）

「・・・いいんだね・・・・謝るなら今のうちだけど・・・」

「誰が、あんたらを助けてくれるかなぁ～～」

「・・・そ、それは・・・」

かれらの言葉に対して、愛花は怯んでしまった。

辺りを見渡してみると、道行く人達が目を伏せて歩いている。

（・・・明らかに、私は知らない・私は関係ないという感じをかもしだしている）

いくらあいつらが不良ぽいといっても、誰かが助けてくれるという考えをもっていたが、こうも誰も助けてくれる気配がないということは想定外だった。

（・・・どうしよう・・・もう、打つ手がない・・・）

愛花はどうしようもなく、後ずさっていった。

一方の不良達は愛花との距離を少しずつ詰めていった。

そして、不良は哀歌の腕をつかもうとしてきた。

もしかしたら通行人の誰かが助けに来てくれるかもという淡い思いをいだいて、助けを求めようとしてが、やっぱり通行人達は目を合わせないように歩いていた。

（・・・やっぱり・・・そう上手くいかないか・・・）

不良達は、そんな愛花の腕をつかんだ。

ただいま、逃亡中

愛花は、もうダメかと諦めた。

バシッ！

「私の友達に何をするんですか！！」

愛花は、あまりのことで何が起こったのか理解できなかった。

数秒後

愛花は、ようやく何が起こったのかを理解した。

ハルが、持っていた荷物でその不良の顔を殴ったのだった。

その一撃に不良はつかんだ腕を放してしまった。

「さっさと逃げましょう！こいつらの相手なんてしないで」

ハルは腕を離された愛花の腕をつかんで、街中を走り抜けていった。

一方、琴葉はその前にさっさと逃げていたようで、二人が走っていったさきの方で待っていた。
「コッチ！・・・アイツらが来る前に、逃げよう」
三人とも街中のことはそれなりに知っていたので、不良たちを振り切れる計算だった。

しばらく走り回った後・・・

「・・・ハアッ、ハアッ・・・ここまでくれば、大丈夫ですよね」
「やっぱり、道草しないで変えればよかった・・・」
「・・・今更・・・そんなことをいっても・・・」

なんとか、三人は不良たちから逃げれたようだった。

今度こそ、三人は帰れるだろう。

ただいま、逃亡中（後書き）

短いですが、我慢してください！

ハルの運命

「振り切れたと思っていたのに～」

振りれてたと思っていていたハル達だったが、帰る途中にまた見つかってしまったのだった。

今回は三人一緒ではなく、一人ずつ逃げていた。

不良達も別れて追いかけていった。

（ほかの人達はどうなったのでしょうか？・・・捕まっていなければいいんだけど・・・）

ハルはそんなことを考えながら逃げていた。

（この角を曲がって・・・次を右に・・・そうすれば、大きな道路に出れるはず・・・）

ハルは後ろを気にする余裕もなく走り抜けていった。

あともう少しで、大きな道路に出れるところまで来た。

（よし、あとはまっすぐでいいはず・・・）

「オイッ！そっちいったぞ！」

（エッ？）

ハルの目の前に不良の一人が現れた。

「ハヒッ」

（待ち伏せをされてた？・・・いや、今はそんなことを気にしている訳には・・・）

ハルは、とっさに近くに角を曲がった。

先がどうなっているのかはわからなかったが、アイツらに捕まるわけにはいかなかった。

・・・だが・・・

（行き止まり！！）

ハルの前には、壁が立ちはだかっていた。

「・・・ハア、ハア、もう逃げられないぞ・・・」
もと来た道を戻ようとして後ろを振り返ってみると、追いかけてきた不良達が道をふさいていた。

（これから、私どうなってしまうのだろうか・・・）

「まったく、手間かけさせやがって・・・だが、それも・・・もう終わりだ・・・」
追いかけてきた不良達がゆっくりとハルに近づいてきた。

・・・ガシッ・・・

「イテェじゃねぇか！」

一番後ろにいた、不良の一人が転んだ。

その後ろに誰かがいる。不良の口調からして、その誰かが何かして不良が転んだようだ。

（私を助けてくれた人は誰？・・・）

背丈は彼らと比べるとわずかばかり低かった。

（体格からして、中高学生ぐらいか・・・あと、男の人だろう）

「テメェ！こんなことしてただで済むと思っているのか？」

不良達は邪魔をした男に凄んできたが、凄まれた方は全く怯える様子はなかった。

「・・・オイ！オマエ！いい度胸しているな・・・俺達を怒らせるとどうなるかわかっているのか？」

「・・・わからねえな・・・いや、寄ってたかって女を追いかけるような奴のことなんて、わかりたくもねぇな」

（アレ？この声聞いたことがある・・）

ハルから見ると影に隠れて男の顔が分からなかったが、その声には聞き覚えがあった。

「あ～～～っ！！」

「相変わらず、騒動しかよんでこねえな！・・・はっきりいって、迷惑なんだよ」

獄寺と不良

「獄寺さん・・・なんでここにいるんですか？」

「・・・・・」

（・・・俺だって、なんでこんなことをしてしまったのかわからないんだよ・・・）

「？？？」

「・・・細かいことは気にするな・・・」

ハルの問いに獄寺は自分がなぜこんな行動にとってしまったのか、未だに理解できなかった。

その結果が、それだった。

「・・・お前はこいつらの仲間か？・・・だったら、他のヤツらの居場所を知っているかもな」

不良達は、まだハルの友達のことを諦めてはいなかった。

「何、言ってやがる？・・・まあ、そんなことはどうでもいい。そ

ういうをするなら、オレの知らないところでやってくれ」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

早い話が『そういうことには巻き込まれたくない・厄介事はゴメンだ』という気持ちだろう。

（まあ、その気持ちは分からなくもない）

今日の街中の通行人と同じだ。

自分に害が及ぶようなことには、見てみぬふりをする。

それは、仕方がないことなのだろう。

（それに、今回は明らかに彼に害が及ぶことは明らかな状況だった）

だが、獄寺はそんな状況に自ら飛び込んできたのだった。

（なんで、獄寺さんはそんなことをしてくれるんでしょうか？）

「・・・第一、一応コイツの知り合いなんだ・・・・・お互いにここは何もなかったということで終わりにしようぜ・・・」

獄寺の口から、意外な言葉が出てきた。
立場的にも人数的にも不良達の方が上のはずだが、獄寺はあえて強気に出たのだった。
（彼の性格からなのか・・・それとも、作戦なのか？）

「おいおい、立場分かっているのか？・・・俺達がそんな脅しで怯むと思っているのか？」
案の定、不良達は獄寺の脅し？を全く相手にはしなかった。

「それじゃあ、力ずくってことか？俺の方はそのほうが、慣れているけどな・・・」
ここで引き下がるような性格ではない獄寺は、不良達を睨みつけた。

「・・・コイツもいい度胸しているじゃないか？俺達にケンカをふっかけて無事ですむと思っているなら、大きな間違いだぜ！」
獄寺の言動が不良達の機嫌を損なったようだ。

不良達は獄寺の周りを取り囲んで今にもケンカをはじめそうだ。

「・・・今さらですが・・・やめておいたほうが・・・」
今まで、黙って男達のやりとりを見ていたハルだったが、このままでは大変なことになるので止めようとした。

だが、案の定不良達がそんなことを聞かなかった。

かといって獄寺の性格を知っているので、彼がここで引くことはないことは明白だった。

（・・・ハア～・・・これは大変なことになりますよね・・・）

獄寺と不良（後書き）

読んでみてわかるとおもいますが、獄寺の言動が原作とはかなり違います

原作とかけ離れすぎないように気をつけるか、それともあえてそのままで行くのか考え中～

形勢逆転

・・・・・ヨワッ・・・・・

獄寺と不良達のケンカは予想通りの結果となった。

不良達が弱いというわけではなかった。

相手が悪かった。
獄寺はマフィアの世界で一応は名の知れていた。

そんな奴が、普通の不良とケンカで負ける訳がない。

「・・・こんなもんかよ・・・もうちょっと、骨があるかとおもったのにな・・・」

「・・・・・・」

「あとは、お前だけだ・・・もちろん、お前には逃げる権利なんかない・・・」

獄寺はゆっくりと残った一人にむかってゆっくりと歩いていった。

（だから言ったのに・・・私を置いて逃げようとしても、あの人は許さないだろう。・・・第一、人の言うことを知らないから・・・）

「おい！大事なことを忘れていないか？こっちには・・・」

「・・・・・すみませ～ん・・・」

ハルが捕まったしまった。

忘れていた

獄寺は不良達の相手にばかりに気を取られていて、肝心？のハルのことを忘れていた。

「・・・形勢逆転だな・・・」

「・・・スミマセ～ン・・・あしでまといで・・・」

「・・・分かっているだろうが・・・変なマネしてみろ・・・どうなるかわかっているよな・・・」

捕まったハルをたてにリーダー格であろう不良は一気に強気に出てきた。

「残念でした！獄寺さんは私のことなんかどうなってもいいって思っているんですよ！だから、私には人質としての価値なんてないんですよ～・・・ホントなんです～」

ハルは不良達に『私には人質としての価値はないこと』を説明した。

だが、不良達はそんなハルの言葉なんて信じてはいなかった。

二人はそれなりの関係ともっていることは明白だった。

そうでなければ、不良達とケンカなんかする訳はない。

「・・・お前がどう思っていても関係ない・・・アイツがどう思っているか・・だ・・・」

不良はニヤニヤと気持ち悪い笑顔を浮かべた。

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・別に～俺達はどっちでもいいけど～・・・ただ、コイツがどうにかなるだけだから～」

「・・・・・」

「・・・オレにどうしろと・・・・」

獄寺はしばらく考えた後、不良達の言うことを聞くほうを選んだ。

「何、いっているんですか？私のことなんて気にしないでください。いつもなら私のことなんて、全く気にしていなかったじゃないですか～」

（・・・そう、いつもなら・・・ハルのことなんてどうなっても構わないという姿勢を貫いているのに・・・どうして、今日にかぎっては・・・）

いつもとは違う獄寺の言動に戸惑いを隠せなかった。

「お前は黙ってろ！・・・ただ、オレ達にしばらく殴られる・・・簡単なことだろ？」

「ふざけないでください！！獄寺サンは関係ないでしょ！・・・悪いのは私でしょ・・・私のせいでこんなことになった」

「・・・そんなことはどうでもいい。俺達はコイツが気に入らない。だから殴る・・・それだけなんだよ」

不良達はケラケラと笑いながら獄寺を取り囲んだ。

（この人達は、普通ではない。絶対に関わってはいけない人達だった）

不良達とのやりとりでハルは、不良達と関わってしまった自分が今になって怖くなってしまった。

「・・・ハイハイ・・・それでいいから・・・さっさとしろよ」

一方の獄寺の方は平然と彼らの言うことを聞いていた。

獄寺と不良

「・・・ずいぶん・・・丈夫な体だな・・・」

「・・・お前らとは鍛え方が違うんだよ・・・どうした？もう終わりか・・・」

不良達はよってたかって、獄寺を殴っていた。

殴られていた獄寺の方は傷を負って、そこから血を出していた。傍から見ているとかなり痛そうとだった。

だが、当の獄寺は日頃から慣れている？からか、全くひるむようなことはしなかった。

それだけではなく、あえて不良達を煽っていった。

あえて煽ったのは、不良達を疲れさせてこんなことをさっさと終わらせようと考えてからだった。

「・・・もう・・・やめてあげてください・・・」

ハルはしぼり出すように言った。

殴られている獄寺の方はそうでもないが、それを見ているハルからしたら痛々しく感じれた。

「・・・嫌だね・・・まだ俺達の気がすまないからな」

ハルをつかめているリーダー格の不良はケラケラと笑いながら獄寺を殴り続けた。

（・・・私が捕まったせいで、こんなことになってしまった・・・私がいなければこんなことにならなかったんじゃないの？・・・そう、私が捕まらなければ・・・）

ハルの頭の中にそんなことがよぎった。

「オイ！さっきまでの勢いはどうした？オレ達を怒らせたお礼がまだだぞ」

目の前ではまだ獄寺は殴られている。

（・・・私がいなくなれば・・・獄寺さんだって、こんな目に合わなくてすみます・・・）

「お前もずいぶんとがんばるな・・・だが、俺達の気はまだはれた

いないからな・・・」

（・・・今、私から気がそれている・・・）

不良達は、獄寺にばかりに気を取られていて

・・・ドシ・・ドシ・・・

・・・ガシッ・・・バチッ・・・

不良達はさらに獄寺を殴り続けた。

（・・・もうちょっと・・・・あともう少しでこの腕から逃げれる・・・そうすれば、獄寺サンもこんな奴に殴られ続けられる必要もなくなる・・・）

・・・ドシ・・ドシ・・・

・・・ガシッ・・・バチッ・・・

（・・・あと、もうちょっと・・・）

「・・・オイオイ・・・ナニにらんでいるんだ?・・・俺達はお前のこういう目が気に入らないんだよ!」

今まで黙って殴られる獄寺を眺めていたリーダー格も殴ろうと獄寺に近づいてきた。

もちろん、捕まっているハルも一緒だ。

ここで抵抗するという選択肢もあったが、ここはおとなしく従うことにした。

「・・・さっさと歩けよ・・・分かっているが、変なマネをしてみようなんて考えるなよ・

・・」

「・・・わかってますよ・・・」

ハルは力なくつぶやいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2944n/

ハルのお話

2011年11月17日17時18分発行